

ゴシック教会堂建築におけるトリフォリウムの建設 工事終了後の使用法：フランスを中心とした事例の 痕跡調査と図像史料分析からの推定

嶋崎，礼
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

<https://hdl.handle.net/2324/7337131>

出版情報：Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ). 85 (771), pp.1105-1111,
2020-05. 日本建築学会
バージョン：
権利関係：© 2020 Architectural Institute of Japan



ゴシック教会堂建築におけるトリフォリウムの建設工事終了後の使用法

フランスを中心とした事例の痕跡調査と図像史料分析からの推定

HOW THE TRIFORIUM OF THE GOTHIC CHURCHES COULD BE USED AFTER THE CONSTRUCTION

Study based on the field survey and the iconographic research mainly in France

嶋 崎 礼^{*1}

Aya SHIMAZAKI

The triforium served as a passageway for workmen during the construction of Gothic churches. However, it is not clear if the triforium was used even after the construction. In this paper we investigate how the triforium was practical in the daily use, by examining the traces in the triforium and the paintings depicting the church interior. The traces of cords and the hooks indicate that the tapestries were hanged from the triforium, and the needles suggest the placing of candles on the floor of the triforium. Furthermore, some paintings show the triforium filled with audiences.

Keywords : Triforium, Gallery, Gothic Architecture, Utility

トリフォリウム, ギャラリー, ゴシック建築, 実用性

はじめに

ゴシック建築の内部立面の中間層（三層構成では第二層、四層構成では第三層）を占めるトリフォリウム（triforium）は、辛うじて一人の通行を許すほどの、狭い通路状のアーケードである。木製の仮設足場を組まなくても建物の高所にアクセスできることから、建設工事中、トリフォリウムは職人の足場や通路として使用されたと考えられている^{注1)}。足場やヴォールト仮枠の一部をトリフォリウムに固定すれば、木材の節約にもなっただろう。

一方、工事の終了後はどのように使用されたのだろうか。聖歌隊や信徒が立ち入ることのあったトリビューンとは異なり^{注2)}、トリフォリウムが典礼上で積極的な役割を果たしていた可能性は低い。通路の幅はたかだか50cm程度であり、欄干もないものが多く、安全とはいえない。建設工事の終了後は主に、ガラス窓の維持管理や、壁面への布やタペストリーの設置、ヴォールト天井の点検視察などの目的で活用されたというのが通説である^{注3)}。しかしその根拠はこれまで示されてこず、もっぱら憶測に基づいて実用性が検討されてきた。というのも、トリフォリウムに関する同時代の記録はほとんど残っておらず、文書史料のみに基づいて当時の使用法を検討することには限界があるからだ。

本稿では文書史料だけでなく、今日トリフォリウム内に残されている痕跡や絵画等の図像史料に基づき、建設工事の終了後にトリフォリウムがどのように使用されていたかを検討する。それらの記録は中世より後の時代に残されたものであるかもしれないが、中世の文

書史料が十分に見つからない以上、近現代の使用法を見ることにも意義はあると考える。

既往研究はタペストリーの設置をトリフォリウムの用途として挙げるが、それ以外に蠟燭など照明器具を設置するにも好都合な場所に思われる。さらに、トリフォリウムに人を収容することができる以上、奏楽の人員が配置されたり、稀ではあっても見物席として活用されたりする機会があったのではなかろうか。

以下で行う痕跡の観察は、筆者が2015年から2017年にかけて行った、現在のフランス共和国内にある27件の教会堂建築のトリフォリウムへの立入調査に基づいている（各調査の概要は個別に注記する）。一方、図像史料の年代や性格は多岐にわたるが、各建築の個別研究や、フランス文化省提供データベース^{注4)}（Mémoire, Joconde）、美術史研究所オンライン資料^{注5)}（bibliothèque numérique de l'INHA）等からゴシック教会堂内部空間を描いた図を蒐集した。

トリフォリウムはフランス以外のヨーロッパ諸国のゴシック教会堂建築にも広く確認されるが、特にフランスに数多く分布していることを踏まえ、本稿では原則としてフランスの事例に基づいて検討を行い、他国の事例は補助的に参照するにとどめる。

1. 布やタペストリーの設置

まず、堂内の荘厳などの目的で壁面に布・タペストリーを吊るすためにトリフォリウムが役立った可能性が考えられる。1175年以降のカンタベリー大聖堂（Canterbury）再建に臨席した年代史家ジャー

^{*1} 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 学術支援職員・工博

Research Assist. Staff, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, The University of Tokyo, Dr.Eng.



Fig.1 *The Mass of Saint Giles*, c. 1500 (Detail). Colored clothes hung over the wall. (London, National Gallery, NG4681. <https://www.nationalgallery.org.uk/>)



Fig.2 Abbey of Saint-Denis (19th century?). Flags hung from the triforium. (Base Mémoire, no. TCF09984)



Fig.3 Amiens Cathedral, nave. Iron hooks under the foliage frieze of the triforium.



Fig.4 Saint-Etienne of Brie-Comte-Robert. Traces of cords on the cornice under the triforium. (Photo by M.Piechaczyk)



Fig.5 Saint-Quentin, north side of the nave. Traces of cords.



Fig.6 Rouen Cathedral, nave, balustrade of the triforium. Traces of cords.



Fig.7 Chalon-sur-Saône Cathedral, choir, balustrade of the clerestory passage. Traces of cords.

ヴェズ (Gervase) は『年代記』の中で、先行して建っていた大司教ランフランクス (Lanfranc, 位: 1070–1089 年) 時代の建物のクリアストーリー階の通路に関して、「高いアーチ [ヴォールト] の辺りには、そこから布やカーテンを吊るすことができる道がある」という記述を残している^{注6)}。

石肌の露出したゴシック内部空間に慣れてしまうと、壁に布がかけられた光景を想像することは難しいかもしれないが、壁面を飾るのは彫刻や彩色などの恒久的な装飾に限られない。教会堂の壁面と布との密接な関係は、布を模した彫刻の存在によってもうかがい知ることができる。メッツ大聖堂 (Metz) の身廊 (外陣, nef (仏)) のトリフォリウムとクリアストーリーの間のフリーズ (Fig.17) には、フックに吊るされた一連の布の意匠が施されている^{注7)}。彩色の一環として同様の布の絵が描かれることもあった^{注8)}。これらは壁に布がかけられることの重要性を示しているといえよう。

1500 年頃サン＝ドニ修道院教会堂 (Abbey of Saint-Denis) の内陣をモデルにして描かれたとされる絵画『聖ジルのミサ』 (Fig.1) では、大アーケードの壁面が色布で飾られている。

布やタペストリーはどのように壁面に固定されたのだろうか。教会堂の壁面や柱には、時折一見して意図不明の鉤状の金属材が見受けられる。例えばブルジュ大聖堂 (Bourges) のピアの上で主廊 (vaisseau central (仏)) の方向に設置されているフックは、構造的な意義 (例えば主廊の反対側のピアとリンクするバーを支持するなど) を有するものとしては小さいため、何らかの装飾を支持するためにつけられたと考えられている^{注9)}。トリフォリウム付近にみられる同様のフックも、タペストリーの設置に役立てられた可能性がある。ランス^{注10)} (Reims)、アミアン^{注11)} (Amiens) (Fig.3)、ボーヴェ^{注12)} (Beauvais)、トロワ (Troyes) の各大聖堂、シャルトルのサン＝ピエール教会堂^{注13)} (Chartres, Saint-Pierre)、ジュジエのサン＝ミッシェル教会堂^{注14)} (Juziers, Saint-Michel)、サン＝ドニ修道院

教会堂^{注15)} (ベイ 2 のみ) において、トリフォリウムの下側のコーニスの下に、フックが狭い間隔でいくつも並んでいる。トリフォリウムの通路は布を運び込むにも好都合であっただろう。

トロワではマグダラのマリアの生涯を描いたタペストリーを吊るすために、88 個のフックが金具職人に注文されたとの記録が残っている^{注16)}。ランスとアミアンとサン＝ドニ以外は全て、内陣にのみフックがあることも注目値する。多くの場合タペストリーは身廊には飾られず、もっぱら内陣の南北の壁と内陣障壁を覆うように設置されたからである^{注17)}。なお、ノワイヨン大聖堂^{注18)} (Noyon) の袖廊やディジョンのノートル＝ダム教会堂^{注19)} (Dijon, Notre-Dame) の身廊 (Fig.8)、ドイツのレーゲンスブルク大聖堂 (Regensburg) の身廊^{注20)} のトリフォリウムの床には、タペストリー等を吊り下げられるフックが固定されていたと思われる溝がある。

タペストリーは特に祭日に設置されたと思われるが、近代以降、今日でもトリフォリウムを布で飾る、あるいはトリフォリウムから大アーケードの壁面に布や旗を垂らすことが行われている (Fig.2)。フックに吊り下げる以外に、紐をトリフォリウム内に固定することも行われた^{注21)}。ブリ＝コント＝ロベールのサン＝テティエンヌ教会堂^{注22)} (Brie-Comte-Robert, Saint-Etienne) (Fig.4) やサン＝カントアン参事会教会堂^{注23)} (Saint-Quentin) の身廊 (Fig.5)、ルーア

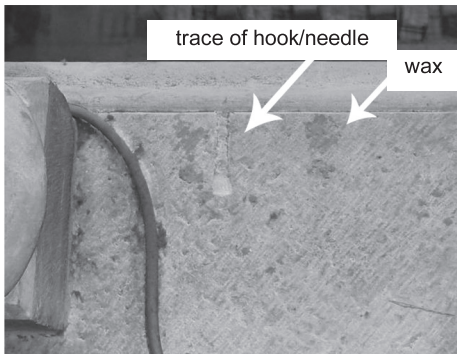


Fig.8 Dijon, Notre-Dame, floor of the triforium. Trace of a hook or a needle. On the right, dropped wax.



Fig.9 Rouen Cathedral, nave, floor of the triforium. Needle to fix a candle.



Fig.10 idem.



Fig.11 Laon Cathedral. Dessin of the exorcism in 1566. The audience in the triforium (above) and in the tribune (below). (Reprinted from Saint-Denis et al.(2002), see note 2)



Fig.12 Reims Cathedral. Engraving depicting the coronation of Louis XIV in 1654. The audience at the clerestory (above) and in the triforium (below). (bibliothèque numérique de l'INHA)

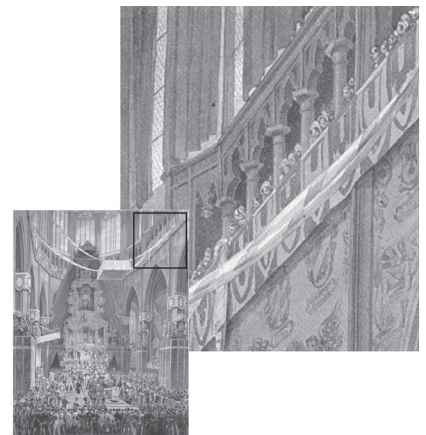


Fig.13 Prague Cathedral. Painting by Eduard Gurk depicting the coronation of Ferdinand V in 1836. (Wikimedia Commons)



Fig.14 Strasbourg Cathedral. Engraving by Isaac Brunn, 1617 (Detail). The organs were placed c. 1324. On the right, a box (minstrel's gallery?)



Fig.15 Chartres Cathedral. The tribune of the organs dates back to the 14th century. (Base Mémoire, no. MH0148497)



Fig.16 Bruxelles Cathedral. The organs on the north side of the nave were placed in 2000.



Fig.17 Metz Cathedral. The organs of the triforium (1537). Above, a frieze of clothes. (Reprinted from ASSECARM (1995), see note 26)

ン大聖堂^{注24)} (Rouen) の身廊 (Fig.6)、そしてシャロン＝シュル＝ソーヌ大聖堂^{注25)} (Chalon-sur-Saône) の内陣 (Fig.7) に見られるように、コーニスや欄干にはしばしば、紐との摩擦でえぐれた痕跡が残されている。

2. 照明の設置

照明器具もトリフォリウムに設置されることがある。例えばナント大聖堂 (Nantes) のトリフォリウムの欄干からは腕木が主廊側に突き出ており、そこからランプが吊り下げられている^{注26)}。今日、トリフォリウムの内部にはほぼ必ず電気照明が配置されていると言っても過言ではなく、通路の床にびっしりと配線が巡っていることも多々あるように、トリフォリウムは内部空間の照明に重要な役割を果たしている。

筆者の調査では、シャロン＝シュル＝ソーヌ、ルーアン (Fig.9,10)、シャロン＝アン＝シャンパーニュ^{注27)} (Châlons-en-Champagne) の各大聖堂、ディジョンのノートル＝ダム教会堂 (Fig.8)、同サン＝ベニーニュ修道院教会堂^{注28)} (Saint-Bénigne de Dijon) のトリフォリウムに、蝋燭やその痕跡、蝋燭設置用の金属の針などが認められた。文書記録は見つかっていないものの^{注29)}、電気照明のなかった中世、同じようにトリフォリウムに蝋燭が置かれていた可能性は十分あるといっていだろう。

3. 見物席として

中世の教会堂では日々の典礼や宗教的儀式に加え集会や世俗的な興行も催されており、それらは時として非常な混雑を招いた^{注30)}。トリフォリウムは日常的な通行場所にこそならなかったものの、観客や参列者を収容するため、特別な機会に開放された可能性は考えられる。

1311年のヴィエンヌ公会議の際、ヴィエンヌ大聖堂^{注31)} (Vienne) の身廊のトリフォリウムの屋根裏に参加者を収容していたののではないかと仮説が提出されている^{注32)}。これはトリフォリウムではなく屋根裏に開く偽トリフォリウム (faux-triforium) であった可能性が高いが、参加者が主廊の様子を見るためにはトリフォリウムの通路に出なければならなかっただろう。

16世紀以降、ゴシック建築での催しや式典の模様を記録した絵画の中には、トリフォリウムの内部に見物人が描かれているものが多いが残っている。

ラン大聖堂 (Laon) で16世紀半ばに行われた悪魔祓いの様子を描いた絵^{注33)} (Fig.11) では、建築の形がかなりデフォルメされてしまっているものの、トリフォリウムとトリビューンの両方に人の姿が認められる。

ランス大聖堂でのルイ14世 (在位1643年–1715年) の戴冠式 (1654年) の場面を描いたジャン・ルポートル (Jean Lepautre) の版画 (Fig.12) には、トリフォリウムの内部に見物人らしき人たちが入っている様子が示されている^{注34)}。その中には小円柱にしがみついているように見える人もいる。トリフォリウムの上のクリアストーリーのガラスは一部取り払われ、ここにも見物人がいる^{注35)}。ルイ15世 (在位1715年–1774年) の戴冠式を描いたピエール・デュラン (Pierre Dulin) の絵画にも同様の場面がある^{注36)}。プラハ大聖堂 (Prague) でのボヘミア王フェルディナンド5世の戴冠式 (1836年)

を描いたエドゥアルド・ギュルク (Eduard Gurck) の絵画 (Fig.13) では、見物人は布で飾った欄干越しに戴冠を見下ろしている。また、ウェストミンスター修道院教会堂 (Westminster) の中間階はトリフォリウムではなく屋根裏に開く偽トリフォリウムだが、ここでのジョージ4世の戴冠式 (1821年) やヴィクトリア女王即位50年記念式典 (1887年) を描いた絵画でも、仮設の欄干らしきものが偽トリフォリウムのアーケードに設置され、その後ろに人影が見える。

これらはトリフォリウムの見物席としての使用を証言する絵画として興味深い。

一方で、特にランス大聖堂の絵画では、トリフォリウムが実際よりも大きく (あるいは人物が小さく) 描かれていたり^{注37)}、トリフォリウムのアーケードの数が実際と異なっていたり^{注38)}と、現実の建築と相違する点も多いことから、絵の信憑性には疑問が残る。ランやランスのトリフォリウムは特に狭く欄干もないため、見物人の安全が十分保たれるとも言いがたい。本当にこのような使い方がされたのだろうか。しかし、もし実際には使われなかったならば、何かしら他の使い方がされるか、別の装飾が施されてそれが描かれただろう (例えばシャルル10世 (在位1824年–1830年) の戴冠式を描いたルイ・デュプレ (Louis Dupré) やルイ・ラフィット (Louis Lafitte) の絵画ではトリフォリウムに彫像が置かれている^{注39)})。現代ほど安全管理の必要性が認識されていなかった時代、大人数を収容する必要に迫られてアーケード状のトリフォリウムが活用された可能性は十分考えられる。

4. その他

シャルトル^{注40)} (Fig.15)、ストラスブール^{注41)} (Fig.14)、メッス^{注42)} (Fig.17)、ケルン^{注43)} (Cologne)、ブリュッセル^{注44)} (Fig.16) (Bruxelles) の各大聖堂では、主廊の壁にオルガンがあたかもツバメの巣のように設置され、トリフォリウムからオルガンへアクセスするようになっている。この位置にオルガンを設けると優れた音響効果が得られるという^{注45)}。またイングランドでは、エクセター大聖堂 (Exeter) のトリフォリウムに、14世紀半ばに聖歌隊ギャラリー (minstrel's gallery) が設置された^{注46)}。1617年から1827年にかけてストラスブール大聖堂の内部を描いた複数の絵画にも、オルガンの東隣のベイのトリフォリウムに、それと同様の箱状のギャラリーのようなものが設置されている様子が記されている (Fig.14)。

また、トリフォリウムの使用例ではないが、中世に数多くの聖遺物を蒐集して巡礼者を集めたマーストリヒトのシント＝セルファース教会堂 (Maastricht, Sint-Servaasbasiliek) では、教会堂の外の広場に集まった巡礼者に対して小人ギャラリー (dwarf gallery、軒下の壁内通路) から聖遺物を顕示していた。その模様は1460年頃の版画本に記録されている^{注47)}。トリフォリウムで同様のことが行われたかどうかは不明だが、一般会衆から離れた高い場所をこのように使うことは、壁内通路の有効な利用法の一つといえる。

結論

トリフォリウム内に残る痕跡や、16～19世紀のいくつかの絵画資料から、建設工事終了後のトリフォリウムの使用法の一端が窺えた。確かにトリフォリウムは日常的に使用されることはなかったかもしれないが、装飾や照明の設置、臨時に人を収容するギャラリー

としては使用されることがあったようだ。今後、他の建物でもトリフォリウム内部の調査を行うことで、本稿で検討した使用法のさらなる裏付けが得られるとともに、その他の使用法も明らかにされる可能性がある。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP14J10678 の助成を受けたものです。

注

- 注 1) 建設工事中のトリフォリウムの使用に関しても、先行研究はほとんどない。建設現場を扱った研究でトリフォリウムに言及されることがあっても（例えば FITCHEN John, *The construction of Gothic cathedrals: a study of medieval vault erection*, Chicago, University of Chicago Press, 1961, p. 20）、実例や裏づけとなる史料が示されることはほとんどない。一方 N. ルヴェロンや D. アンキエはリヨンのサン＝ニジエやサン＝ルー＝デスランの教会堂の調査をもとに、トリフォリウムへの足場の固定について検討した。REVEYRON Nicolas, *Chantiers lyonnais du Moyen Âge (Saint-Jean, Saint-Nizier, Saint-Paul)*, Lyon, Service régional de l'archéologie diff. ALPARA (coll. DARA), 2005, p. 335–337. HANQUIEZ Delphine, *L'église prieurale de Saint-Leu d'Esserent (Oise) : analyse architecturale et archéologique*, thèse doc., Université de Lille 3, Lille, 2008, p. 330, 333. ただこれらの研究でもその他の実例については触れられておらず、筆者の今後の課題としたい。
- 注 2) HÉLIOT Pierre, « L'emplacement des choristes et les tribunes dans les églises du Moyen Âge », *Revue de Musicologie*, t. 52, No. 1, 1966, p. 7–20, esp. p. 8–10 ; LHEURE Michel, *Le triforium : construction et fonctions, XI^e–XVI^e siècle*, Paris, Picard, 2012, p. 30–31. トリビューンは 11 世紀のいわゆる「巡礼路教会堂」で積極的に建設され、巡礼者を受け容れたといわれ、広大なトリビューンが袖廊にまで巡らされている。そこにはしばしば東向きの祭室があり、礼拝上の役割を担っていたことが遺構や文書から明らかになっている。ゴシック期では、ラン大聖堂の袖廊のトリビューンに同様の祭室があり、祭壇も設置されていた。SAINT-DENIS Alain et al., *Laon : la cathédrale*, Paris, Zodiaque (coll. « Le ciel et la pierre »), 2002, p. 200. またノワイヨン大聖堂においても、内陣のトリビューン内部に豊かな柱頭彫刻があり、大天使ミカエルに捧げられた祭室があったことが知られている。SEYMOUR Charles, *La cathédrale Notre-Dame de Noyon au XII^e siècle*, Paris, Arts et métiers graphiques (coll. « Bibliothèque de la Société française d'archéologie »), 1975, p. 73. また、ノワイヨンやソワソンの大聖堂において、トリビューンへ上がる階段が広く整備されているのに比べてトリフォリウムへのアクセスが不便であることも示唆的である。Cf. SANDRON Dany, *La cathédrale de Soissons : architecture du pouvoir*, Paris, Picard, 1998, p. 114–116.
- 注 3) VIOLLET-LE-DUC Eugène Emmanuel, *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, Paris, B. Bance, 1854–1869, t. 4, « Construction », p. 133, t. 9, « Triforium », p. 303. LHEURE, *op.cit.*, p. 26.
- 注 4) <https://www.pop.culture.gouv.fr/> (2019 年 12 月 3 日現在アクセス可) Mémoire はフランスの主として文化財指定された建造物や美術品の画像を集めたデータベース。Joconde はフランスの美術館の所蔵品を横断的に検索できる総合的なオンライン目録。
- 注 5) <https://bibliotheque-numerique.inha.fr/> (2019 年 12 月 3 日現在アクセス可)
- 注 6) “In circuitu vero, ad altitudinem fornicis praedictae, via quaedam facta est qua pallia et cortinae possint suspendi.” MORTET Victor et DESCHAMPS Paul, *Recueil de textes relatifs à l'histoire de l'architecture en France, au Moyen Âge XI^e–XIII^e siècle*, Paris, 1995, p. 215 (301). トリフォリウムを含む壁内通路への中世の言及例については、拙稿「中世における壁内通路への言及について」日本建築学会学術講演梗概集、2014(建築歴史・意匠)、807–808 ページを参照。
- 注 7) ここでは吊るすためのフックも彫刻で表現されている。BRACHMANN Christoph, « La construction de la cathédrale de Metz et de l'église collégiale Notre-Dame-la-Ronde pendant le deuxième tiers du XIII^e siècle », *Congrès archéologique de France*, 1991, t. 149, p. 475, n. 55. ランス大聖堂の西ファサードの裏側下部にある装飾もこれとよく似ている。

- 注 8) VIOLLET-LE-DUC, *op. cit.*, « peinture », t. 7, p. 96–97. THIRION Jacques, « La polychromie dans les monuments du Moyen Âge », *Entretiens du Patrimoine, Architecture et décors peints*, Paris, Direction du patrimoine, 1990, p. 54–57, p. 54. なお、パリのサント＝シャペルで 19 世紀に復元された彩色では、上層礼拝堂と下層礼拝堂の腰壁のアーケードの背景に、布の絵が描かれた。
- 注 9) L'HÉRITIER Maxime, « Les armatures de fer de la cathédrale de Bourges : nouvelles données, nouvelles lectures », *Bulletin monumental*, 2016, vol. 174, p.447–465, p. 448.
- 注 10) トリフォリウムへの立入調査は Grand-Est 地域圏 DRAC の Michel Luka 氏と Quentin Toubart 氏の立ち会いのもと 2016 年 6 月 3 日に行った。以下全ての調査は筆者が単独で遂行した。調査内容は通路内部の石積みの観察、材料の調査、メジャーやレーザー距離計による寸法の記録、写真撮影等である。各調査の成果については今後報告していきたい。
- 注 11) 2017 年 5 月 24 日調査。Centre des Monuments Nationaux の Alain Demaret 氏に立ち会っていただいた。なお、ピカルディー地方の金属材を研究した E. ルフェーブルによれば、アミアンとボーヴェのフックは 13 世紀の建設当初のものである。また、これらの大聖堂では中世以来タペストリーを所有していたとの記録も残っている。LEFEBVRE Émeline, *La place et le rôle des métaux dans l'architecture gothique en Picardie*, thèse doc., Université de Picardie-Jules Verne, Amiens, 2014, p. 124–125.
- 注 12) 2016 年 11 月 3 日調査。同大聖堂修復建築家の Jean-Lucien Guénoun 氏と助手の方々に立ち会っていただいた。
- 注 13) 2017 年 9 月 1 日調査。シャルトルの directeur des Affaires Culturelles の Paul Bridier 氏と助手の方々に立ち会っていただいた。なおここではフックがコーニスの下ではなくコーニスと欄干の間にある。
- 注 14) 2017 年 8 月 10 日調査。同市 maire-adjoint の Alain Gravat 氏に立ち会っていただいた。
- 注 15) 2017 年 2 月 8 日調査。UDAP の ingénieur des Services Culturels et du Patrimoine の François-Xavier Créteaux 氏に調査の許可をいただき、当日は緊急連絡係として木村映美さんに付き添っていただいた。
- 注 16) WEIGERT Laura, « Les tentures de chœur des églises françaises du Moyen Âge à la Renaissance », *Saints de chœurs : tapisseries du Moyen Âge et de la Renaissance*, Milan, 5 Continents, 2004, p. 17–39, p. 24.
- 注 17) WEIGERT, *op. cit.*, p. 22.
- 注 18) 2015 年 3 月 25 日、2016 年 8 月 10～12 日、9 月 29 日、12 月 6 日調査。Picardie Jules Verne 大学の Arnaud Timbert 教授、Musées de Noyon の François Debrabant 氏とノワイヨン市 Atelier du patrimoine のスタッフの方々に案内していただいた。
- 注 19) 2017 年 7 月 29 日調査。同市の Chargé de sécurité の Philippe Tardy 氏に許可をいただき、Animateur de l'architecture et du patrimoine の Laurent Cessin 氏、オルガニストの Dominique Geniau 氏に案内していただいた。
- 注 20) PAPAJANNI, *Die Erschließung des Regensburger Domes durch horizontale Laufgänge und vertikale Treppenanlagen*, *op. cit.*, Bildband 1, p. 46, Abb. 73. 同じ図に、蠟燭設置用の針が刺さっていた痕跡も示されている。
- 注 21) 2016 年に筆者がストラスブール大聖堂を訪れた際には、トリフォリウムの小柱に金属の腕木を取り付け、そこからワイヤーを垂らしてタペストリーを吊っていた。このような方法では紐と石材の接触がないため、下に述べるような石材の傷がつきにくいという利点が考えられる。
- 注 22) 2016 年 2 月 24 日調査。ブリ＝コント＝ロベールの紐の痕跡に関しては、Les Amis du Vieux Château de Brie-Comte-Robert の M. Piechaczkyk 氏に示唆をいただいた。
- 注 23) 2016 年 6 月 14 日調査。Conseiller Municipal délégué au patrimoine culturel et historique の Bernard Delaire 氏に案内していただいた。
- 注 24) 2017 年 6 月 20 日調査。technicien des Bâtiments de France の Éric Bigot 氏に案内していただいた。
- 注 25) 2017 年 7 月 26 日調査。同市 technicien des travaux の Nathalie Dion 氏に立ち会っていただいた。
- 注 26) ナント大聖堂は 19 世紀に内陣が身廊と同じフランボワイヤン様式で改築された。トリフォリウムの腕木は内陣・身廊いずれにもあるが、詳細は確認できなかった。腕木のないベイもあることから、近代以降につけられた可能性もある。なお、ドル＝ド＝ブルターニュ大聖堂 (Dol-de-Bretagne) の内陣では、トリフォリウムの床に置かれた腕木がシャンデリアを吊り下げている。
- 注 27) 2016 年 6 月 1 日調査。同市の Animation du Patrimoine の Jennifer

- Truffaut 氏に案内していただいた。
- 注 28) 2017 年 9 月 4 日調査。同大聖堂聖具係の Sébastien Carcel 氏に立ち会っていた。
- 注 29) ルーアン大聖堂の身廊の偽トリビューンの狭い通路（大アーケードのアーチの上）には、17 世紀に蝋燭が置かれていたとの記録が残っている。トリフォリウム以上にアクセス困難な偽トリビューンの通路にさへ蝋燭が置かれていたとすれば、トリフォリウムにも置かれていたと考える理由はないように思われる。DESCUBES Jean-Charles et SENTILHES Armelle (eds.), *Rouen : primatiale de Normandie*, Strasbourg, la Nuée bleue (coll. « La grâce d'une cathédrale »), 2012, p. 206.
- 注 30) ジャン・ジャンペル『カテドラルを建てた人びと』飯田喜四郎訳、鹿島出版会（SD 選書）、東京、61 ページ。
- 注 31) 2017 年 9 月 15 日調査。Association Cathédrale Vivante の Roger Lauxerois 氏に案内していただいた。
- 注 32) 屋根裏の装飾やその他のディテールに基づく。BOUTICOURT Émilien et PARRON Isabelle, « Saint-Maurice de Vienne, une cathédrale en chantier au début du XIV^e siècle », LAUXEROIS Roger (dir.), *Vienne au crépuscule des templiers*, Grenoble, PUG, 2014, p. 41–57.
- 注 33) 1566 年、ラン大聖堂において、ラン司教ジャン・ド・ブールによりニコル・オブリーという若い女性の悪魔祓いが行われた。見物のために詰めかけた群衆は 2 万人ともいわれ、そのために仮設の足場も組まれたという。FERBER Sarah, *Demonic Possession and Exorcism in Early Modern France*, Abingdon, Routledge, 2004, p. 30. 当時ランでこの出来事を目撃したヘブライ語教授ブルヴェーズの著作によりこの話が広く知られるようになった。ここに引用した絵はその著作に付録していたものである。SAINT-DENIS Alain et al., *op. cit.*.
- 注 34) Bibliothèque numérique de l'INHA, Identifiant numérique NUM OC 4 ; NUM OC 5
- 注 35) ランス大聖堂のクリアストーリー外部には通行可能なスペースがあるが、現在の窓ガラスはこのような開く構造にはなっていない。
- 注 36) base Joconde, numéro d'inventaire INV 26312, recto
- 注 37) ランス大聖堂のトリフォリウムの高さは約 473cm（筆者測定）なので、人間の背丈の 3 倍程度のはずである。しかしルポトルやデュランの絵では明らかに人間の小ささが実際よりも誇張されている。建物をより大きく見せかける、あるいはより多くの見物人がいたように見せかけるための画家の意図的な工作とも考えられる。
- 注 38) ルポトルの絵ではランス大聖堂のアプスのトリフォリウムが 2 連ではなく 4 連になっている。
- 注 39) base Joconde, numéro d'inventaire INV 26478, recto ; INV 27418, recto
- 注 40) 現在、大聖堂の主オルガンは身廊南側の壁上部に設置され、トリフォリウムからアクセスされる。シャルトル大聖堂のホームページによればオルガンを支える木製のトリビューンは 14 世紀からこの場所にあった。http://www.cathedrale-chartres.org/fr/le-grand-orgue,75.html (2018 年 7 月 19 日閲覧)
- 注 41) ストラスブール大聖堂で現在の位置（身廊北側第 2 ベイのトリフォリウム）にオルガンが置かれたのは 1324 年頃で、台 (tribune) はこの時代に属する。フランボワイヤン様式の外装箱 (buffet) は 1489 年頃のもの。REBER Pascal, « Les grandes orgues », DORÉ Joseph (dir.), *Strasbourg, Strasbourg, la Nuée bleue* (coll. « La grâce d'une cathédrale »), 2007, p. 281.
- 注 42) 身廊南東側のトリフォリウムに設置されたオルガンはストラスブールやシャルトルのものよりずっと小さい。最初のもは 1537 年に遡り、再建や修復を経て現在に至っている。ルネサンス様式のレリーフの施された台には当初の材が多く残る。ASSECARM (Association d'étude pour la coordination des activités régionales musicales), « Metz, cathédrale Saint-Étienne (orgue du triforium) » dans *Orgues de Lorraine, Moselle H à Mi*, Metz, Éd. Serpenoise (coll. « Orgues de Lorraine »), 1995, p. 1167–1185.
- 注 43) ケルン大聖堂の身廊北側の壁にオルガンが設置されたのは 1998 年。ケルン大聖堂ホームページ、https://www.koelner-dom.de/dommusik/domorgel/?L=1 (2018 年 9 月 26 日閲覧)
- 注 44) 3 つの外装箱からなる大規模なオルガン。2000 年に身廊北側の壁に設置された。ブリュッセル市オルガン協会 (BSO) ホームページ、http://brusselscityoforgans.org/cathedrale.html (2018 年 9 月 26 日閲覧)
- 注 45) 前掲 BSO ホームページ ; *Orgues de Lorraine, op. cit.*, p. 1167.
- 注 46) BYNG Gabriel, « The Function and Iconography of the Minstrels' Gallery at Exeter Cathedral », *Journal of the British Archaeological Association*, septembre 2014, vol. 167, no 1, p. 133153.
- 注 47) 顕示された聖遺物には聖セルヴァティウスの布、巡礼道具、司教杖、胸像の聖遺物容器に収められた頭部などが含まれる。MONTGOMERY Scott B., « Relics and Pilgrimage in the Xylographic Book of St. Servatius of Maastricht », *Art and Architecture of Late Medieval Pilgrimage in Northern Europe and the British Isles*, Leiden, Brill, 2004, vol.2, p. 669–691.
- (特記のない写真は筆者撮影)

HOW THE TRIFORIUM OF THE GOTHIC CHURCHES COULD BE USED AFTER THE CONSTRUCTION

Study based on the field survey and the iconographic research mainly in France

Aya SHIMAZAKI^{*1}

^{*1} Research Assist. Staff, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, The University of Tokyo, Dr.Eng.

The triforium is a narrow passageway situated in the middle height of the Gothic interior wall. It is considered that during the construction of a building the triforium was used by workmen as a passageway and as a platform to fix the scaffoldings and the centering frames. On the other hand, it is not clear if the triforium was used even after the construction. As the triforium passage is narrow and often dangerous, it is unlikely that the laity walked in and out the triforium ceaselessly. Existing researches assert that the triforium was used only occasionally for maintenances and for hanging the tapestries, but they do not indicate any evidence. In this paper, we investigate how the triforium was used after the construction of a building, by examining the traces in the triforium passage and the paintings depicting the church interior. Even if these traces and paintings can be later ones, they offer some hints to study the usages in the middle ages.

1. Hanging the tapestries

Gervase of Canterbury wrote in his Chronicle (around 1180) that the clerestory passage of the old Canterbury Cathedral had been used for hanging the clothes. The iron hooks under the triforium of the Cathedrals of Reims, Amiens, Beauvais, Troyes and so on could be used for this purpose. In several monuments, the friction of cords had caused deep trenches on the floor and the balustrade of the triforium (Brie-Comte-Robert, Saint-Quentin, Rouen Cathedral, Chalon-sur-Saône Cathedral).

2. Placing the candles

Candles, needles, and traces of them were found on the floor of the triforium (Cathedrals of Rouen, Chalon-sur-Saône, Châlons-en-Champagne and Dijon, Notre-Dame of Dijon). Today, electric lightings are commonly used instead of candles.

3. Accommodating the audience

Some paintings show the triforium filled with audiences. They witness an exorcism (Laon Cathedral, 1566) or a coronation (Reims Cathedral, 1654, 1722, Prague Cathedral, 1836). These paintings suggest that the triforium could accommodate people occasionally.

In some cathedrals the organs are fixed to the triforium and accessed from the passage. Those of Chartres and Strasbourg date back to the middle ages and those of Metz to the 16th century.

The triforium doesn't seem to be used in daily worship. However, it was useful for hanging the clothes, placing the lighting and sometimes, accommodating the audience. Further study may lead to finding other usages.

(2019年8月10日原稿受理, 2020年1月29日採用決定)